

体育科 第1学年	ね ら い	ゲームの行い方を知り、得点の狙い方や攻め方、楽しくゲームができる場づくりについて考えさせる中で、きまりを守り友だちと仲良くゲームをしたり、勝敗を受け入れたりすることができるようにする。
--------------------	-------------	--

【単元名】ボールけりゲーム

【復興教育の視点】

- ・ 指示をしっかりと聞き、素早く行動できるようにする。
- ・ 健康な体を作り、困ったときも励まし、協力し乗り越えるたくましい心を育てる。

《「いわての復興教育」の内容との関連》

絆⑤友情 心を開いて話のできる友だち、助け合いや励まし合いのできる友だちづくり、友情を大切にすることを養うこと。

(技⑳学校での日頃の備え)

【実践の概要】

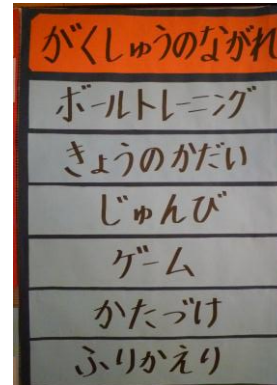
- ① 毎時間、ゲーにつながる運動（ボールトレーニング）を行う。
- ② 「ゲームのマナー」「やくそく」「はげます言葉」を掲示し、意識して取り組ませる。
- ③ 簡単なきまりを工夫したり、作戦タイムをとり攻め方を工夫したりできるようにする。

【実践の詳細】

授業者の思い

大震災の際、当時の学校においては、日頃の避難訓練を生かして、指示を聞き素早く安全に避難することができた。しかし、その後、思ったよりも波が迫ってくるのを見てもっと高台に避難することとなった。また、ご厚意で近くの民家に児童と共にいらせてもらった。暗くなってから、体育館に移動し、ござやマットをしき、それぞれのジャンパーやカーテンを布団代わりに寝た。一夜あけ、子どもたちは全員無事にお家の人に引き渡された。

この経験から、しっかりと指示を聞くことや素早く整列・移動ができること、つらいときも励まし合いながら、乗り越えていくことが大事だと感じた。復興教育に関わって体育科では、指示をしっかりと聞き素早く行動することができるようにしていかなければいけない。また、健康な体を作り、困ったときも励まし、協力し乗り越えるたくましい心を育てていきたい。



① ボールトレーニング

〈意欲づくり ①早い動き ③楽しい活動〉

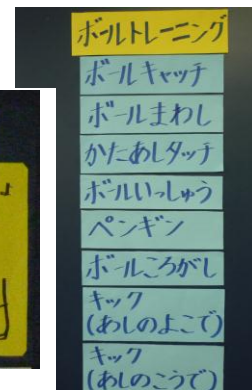
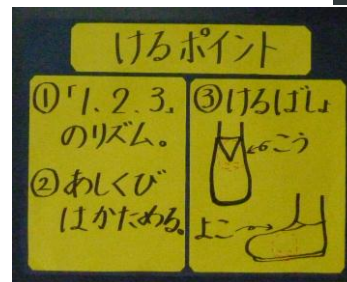
授業の導入時に、ボールを操作する技能を高めるために

毎回準備運動を兼ねてゲームにつながる運動である

「ボールトレーニング」を取り入れた。

低学でも一人ひとりボールにふれる機会を多くもてるように
柔らかいサッカーボールを学級児童数分購入した。

音楽に合わせて楽しく活動できるようにし、ボールをける
ポイントについても掲示し、皆で確認できるようにした。



準備から後片付けまで、すべて自分たちで

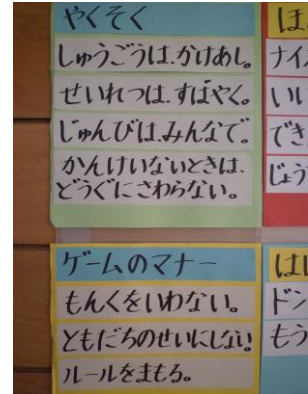
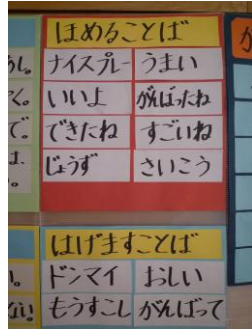
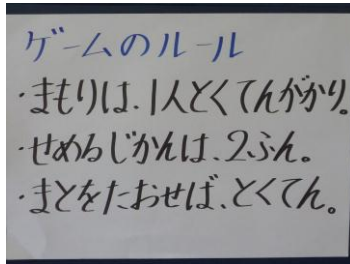
本単元の指導にあたっては、環境整備を十分配慮した上で、授業で使う用具の準備、後片付けを1年生児童が行った。自分たちで協力して活動する機会を増やしていくことで、助け合い・励まし合いの心が児童に育まれるようにしていきたい。

② 「ゲームのマナー」「やくそく」「はげます言葉」の掲示

〈意欲づくり ②ルールの徹底 ③楽しい活動〉

きまりや勝敗を受け入れる態度を伸ばすために、紙板書を提示し、意識して取り組めるようにした。掲示してあるもの以外に、授業の中で新しくできたものは書き加えていき、自分たちの成長が感じられるようにした。

(振り返りの評価にも生かす)



③ 簡単なきまりを工夫したり、作戦タイムをとり攻め方を工夫したりできるように

〈意欲づくり ②ルールの徹底 ③楽しい活動〉

本時の目標

チームの仲間と協力して、作戦を工夫し、楽しくゲームをすることができるようにする。(本時 全7時間中の6時間目)

きまりの工夫として、的ごとに点数を変えたり、きよりを変えたりしてゲームを経験してきた。本時は、作戦を工夫することを意識して授業を行った。コートは円形で、円の中心付近にある的をねらう。的のそれぞれに当たると得点で、ペットボトル1点、段ボール(中)2点、(大)3点。円の外周ラインからの的を狙い、守備側のチームが防ぐ。ゲーム時間は2分。ゲームの最初に作戦タイムをとり、チームの作戦を決定する。1試合終わると、全体で良い動きを確認して、次のゲームに生かすようにした。片付け後は、振り返りカードに「今日のがんばるまん」「自己評価」を記入し、良かったこと、こまったことと合わせて発表させた。



(作戦の例)



授業の成果と課題

楽しさを味わわせるのも復興教育!

成果

- ・ マナーや言葉の指導ができた
- ・ 場、用具が工夫されていた
- ・ 作戦タイムが効果的であった
- ・ ルールが簡単で楽しい

課題

- ・ いいところはその都度ほめる
- ・ ゲームの最中にもほめ言葉を

防災教育 教員研修	ね ら い	津波防災教育学習会をとおして、復興教育を支える内容の一つである「津波防災」について、科学的な知識を学び、理解を深めることにより、子どもたちの「生き抜く力」や「人としてのあり方や生き方を考える力」を高めていく手立てについて、研究を深めていく契機とする。
----------------------	-------------	---

【題材】津波防災教育学習会

【日時】平成24年12月3日（月）13時30分から16時45分まで

【対象】宮古市内小中学校教員

【「いわての復興教育」の内容との関連】

- ・自然①災害発生メカニズム 土・水・風・火・雨などの性質を理解し、地震や津波、風水害、火災など自然災害が発生するメカニズムについて理解できるようにする。
- ・自然③郷土の震災の歴史 過去に郷土で起きた災害の様子を調べ、郷土の自然災害の特性や災害を防ぐための努力や工夫について理解できるようにする。

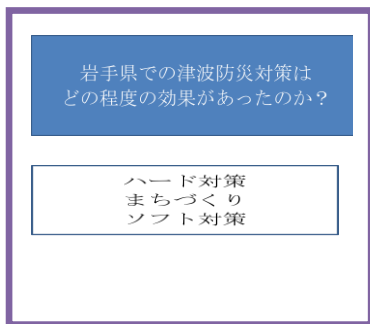
【実践の概要】

復興教育の推進にあたり、基礎学習として防災教育の充実のため、関係機関との連携が必要であると考えた。10月に「岩手大学地域防災研究センター」の堺先生を訪ね、本校の復興教育についてのアドバイスをいただいた。その際、まず教える側の教員の津波防災に関する理解を深めることが重要であると考え、堺先生を講師に「津波防災教育学習会」を実施することとした。

【実践の詳細】

学習会の実施に当たり、地域防災研究センターからの提案を受け、本校教員だけでなく、広く宮古市内の小中学校の教員の参加を募ることにした。本校教員、指導主事の先生方の参加も含め、参加申込は34名あった。

① 岩手大学地域防災研究センター 堺先生の講義



始めに、東日本大地震津波による岩手県の被害状況について話された。地震の概要、岩手県内の主な遡上高、被害状況について、資料を提示していただきながら、説明していただいた。これまでの岩手県の津波防災対策についての話の中で、

「防潮堤を高くすることには限界があるが、心の防潮堤はいくらでも高くできる」

という言葉があった。ハード対策で作った防潮堤などで、避難時間をかせいだりすることもできるが、やはり津波から命を守るためには、我々人間の心の中の防災意識を高めていく必要があると考えさせられた。防災施設、まちづくりも必要だが、最終的には「迅速な避難」ができるかどうか、一番重要である。その後、「教材ソフト」「短期間で成果をあげた小学校の取り組み事例」「津波のメカニズム」等についての説明があった。

② グループワーク ～ 教材 DVD を活用して ～

講義の後は、参加者を担当学年ごとになるように5人位ずつ6班に分け、グループワークを実施した。

【テーマ】各学年学活等で、「津波防災」について授業をする場合、45分をどのように構成するか

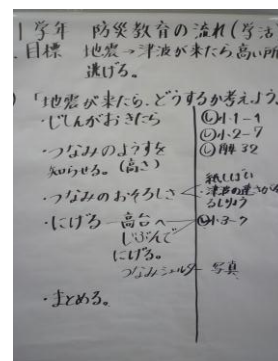
- 【手順】①「津波防災学習教材」のDVDの内容を確認する
- ② 45分の授業内容について考える
 - ③ 教材の中の必要な素材を取捨選択してまとめる
 - ④ 発表の準備をする



この学習教材は、平成18年3月に岩手県と岩手大学が、宮古市教育委員会と連携して作成したものである。

学年毎のモデルケースが示されており、自ら授業内容を組み立て、授業に必要な素材を自由に選ぶことができる教材である（資料集としての性格が強い）。アニメーション、ビデオなどの動画が収録されており、効率的に使用できるよう、パワーポイントが基本ソフトとなっている。

各グループの参加者は、パソコンでDVDの内容を確認。自分のグループの対象学年を想定して、授業内容を組み立てていった。パワーポイントのモデルケースを組み替えたり、模造紙に流れを書いたりしてまとめた。



③ 「ふりかえり」 ～ グループ毎に考えた45分の内容について発表する ～

学習会の最後は、グループ毎に考えた授業内容について発表した。それぞれ、学年の発達段階に応じて内容を考えていた。東日本大震災後ということで、教材の中の津波の映像や被害の様子など、生々しいものが含まれており、児童の心情を考えると使えないと考えられるものがあった。児童の心のケアの部分まで考え、教材を再構成できたことは有意義であった。（プロジェクターを使用しての発表の様子）

学習会の成果と課題

- 本校だけの取組だけでなく、宮古市内の多くの学校の先生方にも、防災教育推進の大切さを認識していただく機会を設定できたことがよかった。
- 今回の研修会で終わりということではなく、今後も地域防災研究センター、宮古市教育委員会とも連携し、学習会を継続して実施できるよう働きかけていきたい。

さらに、東日本大震災を経験した地域の児童が、自分の命を自分で守っていけるようになるための、新しいDVD教材を作成することができれば、これからよりよい津波防災学習を展開していけると考える。

